五元集

元

イ4
3157
16(1)

北林藏書

長栄文集は元亨秋書なときこえしを
集編ありけるをそれしの号をやめて
名となむせられけりこれハ延宝にはじまり
く寶永に終るその間五元をおさめ
まるゝ故なりけし。しかるに晋子の滅没
にいたつてまれ人の家にかゝりとも志れ
もしてなしも正徳より今延享まで
にこれも又五元を経たりさるまてその名
の久しくきこえんく此集の世にかくれ
あるをやこの国中をくまなく

坂東藏書

14
3157
16
(1)

とこなるおほん神につかふ大徳のまなか
た代の物このみて多くはつめもとれ
仲に此書もこし法師つたへるかきしか
なに宝とめてよのしゆきこめれたら
小蝕うくひめんむの浄蓮もかひけつて
清樋をすゝめる宮奴の枚の嵐に称ふる
なもいひよらしろめくやかもいれんされ
をなのつらう安楽日志ます此方のきたに
よのともは縁を求めてみんなをとふ
めるに大徳にけさる商すてもきつくへの

くるのこゝろをとつふやきなからともいへて
を締をかへてあるこゝ練ふいと
なかれは歩きもこれし得るやなとなし
人になる月のうらぬかつらのこゝさなう
らしあつ空亭もとよりこれをほく
先師の妙を悩しめきえんと清にふ
おもひてとし をこのゝ称さまことや
この法ほよく掃ふ人をきくよ帝ら
すくなりなるよのなかれはしめより
称ひしこゝをかへりてもとめる

よゆるしにされと彼家に申さしむる
るすなをとのさまかりあけさらつ
うらうそ衣通姫の庭に七日まて
さちさうけかし者のこゝたころ
さしすやめてありけんかくしてあさ
つゝりまゐらせひもてかゝたる
よみの紙を中よりおりかさねめに
草稿のやうよみしるものゝ書墨八
十八丁を一冊とせるをのせて香子れ
月澤今からをさらくかこうしられしくも

志さりしくもあかれすもめつらしくもまは
ろしのかんさしを得てかたりしこともち
うくやとおりふしもあやま成へしく今はた
しめよりのおねさうへしと櫃よおさめ
うかくさとこともなく衆成というの業
をとりて氷下ある魚をも画くのこ
とくつ左をまへさうつて梓行
し世の香子を志るさる人とさうろ
さしをおなしくし　傳わぬ

百萬坊旨原

[illegible]

五元集

延宝　天和
貞享　元禄
宝永

宝晋齋ハ米元章ヵ硯の裏ニ
鐫入たる号なし三弄子其硯
を予ふ伺ひて宝井晋子もし
いつしか此号を写しくれかへりとて
筆をすてに述ぬるをやゝそ
佐玄龍ヵ額を需てしるす月の

軒葉よりけり
延宝乃ころしめ桃青門に入し
より宝永の万々歳をよみ初し
いへるをふきしりなり

其角

五元集

四十の賀し侍へる家にて
御秘蔵に墨をすらせて梅見哉

旅 大音寺
ためしやこん会の家も取らるて

加州小松観音寺奉納
梅の木旦那を請て庭にあり
芭蕉翁のゆかりけまかし
かりて絵讃をこひけるに
せめてものなえ柿よんめの花

曉
くも上は霜をうけてやむめの花

不曲亭
あせを拭目あてゝ梅の匂ひ
こつとりと風のやむ夜ハ藪の梅
あつしさく梅のさけ目や梅の花

宰府奉納
守梅乃ふかひやさし野老賣

和心水推敲之句
きてくれよき月みより梅の門

梅津氏　於祖父大坂
表の軍功によりて
御感状　御太刀を頂戴
せられ正月十七日の事とや
依丹上杉家の家臣
十七日としあの風おつて
ても正月十七日讀用の具
何見其雲家督執權として
けふのかへ候と
幡指を文臺照やむめの花

えりまき珠唱あてゝ人の
息を祝ふとりふさし
夜光る梅のつぼみや貝の玉
仁右衛門守との所望よ
月満ちてかひぬ玉葉あり
御梅や千代をまつとて
外様と手向の梅を植えり
元禄十五年二月九日
聖廟八百年御忌能
菅原御社讃香連誹会
興行一座
梅松やあがむる数も八百所
氷肌玉骨とこのや

音なし花の名にも梅の皮
久松粛山亭にて
梅咲くや岩の星乃白まれ
百八の鐘で迷ひや開ひんも
芭蕉庵をとひて
宮や十月にても聞しんめ
三つの谷に葉数ん壱のあや
腕神のつまなきかくは梅乃花
篇本おくいた是なやこの梅
鶯の当たを道にはつ
止丘隅

うくひすといてあらせん　杉狭
茶臼にまはりる偶に
鶯や水にのる邑をはなす　日山
茶杉まる里を書る絵ま
うくひすの曲る枝を削らん
鶯ふ来なるも　ひさかへる
うくひすや声を谷から　汎海

市隅

竹とんて鶯来り　竹虎岸
とひありや
うしとうふん
雀子やはつり障子の笹の影

長嘯の記に漢字の歌あり
とて出ゆすりてまてあに
佛をさえ日毎に世を
にあれや聖をた日刈りにあ
はるかおくいんをむまのえこ
のこしつる其ゆかをおもひて
土手のるくりんを無下に葉つ於
正月巳ヒ布施の弁才天へ
諸仏の奉納
玉椿昼とみへてや布於亀

梅津硯水會に
窓柳やれと抜むころひぬ大齋中
正月廿日冠里公に伺在
菜刻みの上手を招る蕨ヶ家
接木を画て
木むせるの中継とやなんてつるん
十一日
お汁粉を還城楽のつもと引
京清ヶ和帯みせなや二篠
漸覺春相泥ヒらふ切白
削らけ膏薬ねりの梟にあれ

畠のう路中よみさしかなかつこ
二人しつらのうけ梅に
あつき扇二つをとふこゑ
百人の雪搔志なし蕣白
万葉志つるも朱雀の柳を
はり所のかうしまを
きらひもい西の兎にあたひり
とはつもも髭は白つる蕣なり
七種や路のみ鮮の枕もと
あく出や詠はうるし鴬鳥
砂植の花葉も茶より初なみ

河州八尾
娵々乙里

渓邊双白鷺

沫に鷺芹摘はな流るゝか

うすら氷やひつゝに咲る芹の花

一筋ハかゝる手ぬより物かり

石下清な流や むすき硯

白魚や海苔ハ下邊の買合せ

汐みち紛れゝ海の里の味

白魚て漁翁ハ薫にあらしゆら

白うをの罾に何ら流ひかり氷

陽炎や小様乃様にぬれそれ

志らし可亥は

ごすらみや女房もせん水祝

衆鼠へ懐の菓をひろきて

引つ逃て松を入いわる鼠らな

寶引小坊主の角をおくくせ

帯せぬて弥次まはし踏宴

雑煮人神の歟をわりて七人ら

句を書き袖中に大黒をもれ

代めらせもそ桜ひらつ送り

年頭の桜の口ぬく小槌らな

蚕成

三月正當三十日

山吹も柳の糸のはらみかな

梟日あたゝめ目讀や朧月

連りしや太神宮へ一つゝ

春霞や天氣定めて棹下し

格枝綰馬合は

ことし斯蚕かえより稲荷山

禁固ヲ破りて暇ヲ玉ハルゝ

破や見惜い餞なる天乃ゝ兒

やふ入やそれハいかなの是なる星

はゝしきろえ

故赤穂城主浅野少府監長矩之舊臣大石内藏之助等四十六人同志異体報亡君之讎令茲二月四日官裁下令一時伏刃齊屍

万世のさへつり黄舌をひるかへし肺肝をつゝまく

うくひすに此芥子酢ハなみたかな

冨森春帆大高子葉神崎竹平これらか名ハ焦尾琴にも乗り聞えける

黙印半面美人の字を彫て琴形
の中ニ備ヘタルをはじめて冠里公の
万句の序巻ニ押弘め侍るとて

まつ目そへ子あ書はじめかな

悼後ゝ立志　初音ハ女之

昔られ初音三井なる芝居まち

題水

ちく万河またの水や鮫の籠

画賛

拾得の風巾かゝるむや玉箒
家ふけハ帰る水くみの寺

奉納

金柑や色青よりても稲荷山

蔵入や下ハあするうや箏

ちよ人や牛合戦して大原を

元禄丙子のとしむ月末つかた
游行ちらし出山するおあそひ侍り
皇中の梅のわづかに六分斗
あり蛙のかゝるをみつけて賦乃
草茎なりへしとおもひ侍る

草茎も包む塔も雪ならん
咄牛房もはなり　柳一条

御忌
人の世や乃どかなる日に濡る林

本多従弟公子にて
春花衣や草津の鞭のゆめハかり
浅草川浪舟
向上ハ柳からんや百千鳥
柳一子ハ鼓もうらす寿もしほ

摑干や柳の曲をつゞ不　狙

市川才牛追善
一子九蔵名をつぎ侍りて
塗髭の父ハなかりや雛の壱
菜苑
黒胡麻てこそあへぬか土筆

春雨やひきめの玉ハ柏ばし

旅所あいさつ

関の東のあるじはとくに梅の袖

新三十三間堂

花紗やきのふの箭かずも未終り

青柳に蝙蝠つたふ夕かな

柳上読書の図に

汐さ海に読書の窓ありて柳は

仙城の賢なるに似柳かな

春雨

槐に立てつなくや船の雨もめ

比ゑは何ごともなし日くれ

二月十五日上京発足

西行の死出路を旅のはじめかな

是則武士は唯乃る波岸かな

佛若ニ大晦日に入滅ありて
けふ仏となりちやうす
へきりか室のさめけれハ
往生もふのそみなるへし
佛もふれくその花に目出度
山里の名もあつしや佐福法
初春の盆も見んより北老賣
とまらぬ里も大原の里ひより
野嵐のこれをふかんにつく
竹の千枝や柳を羽ね蕗のとう
梅のさやけ一すもふきのとう

二月十七日京驛
西生の勝都のちまたにて巻ん
おほらふ松の黒さに目出度
彫焼の浜を部の居を閉て
一捻よ玉子を送る人そし
はつるや雪の玉和十とよむ
南都の何そふ　雨
傘や薪の夜の往生もし
無車馬喧
夕日郭町中にみなこてゆ

見獅子舎有感

すゝしさや獅子ハ獣の君なれと

蝶とふや猿をなのひめし交画者

菩薩眉に花をつんましてしてある

釈菜

聖堂にてはめて蝶の被り

百とせハねふる薬乃こてふ哉

柳燕圖

ひるの声をうこかし柳哉

茶の花に燕ふらしそ 里蔑

画賛

蕎やかろく巣を出 凡仲

階子からふたりに乃へつれぬ

海面の灯をけし得る津ハめぬ

傘に嫗かさうるぬれし燕

朧やひそかゆられや夕日影

うつしてさ髭く雉の跛ふ

へうとし雉をとゝむる犬の声

角田川にて

あれも其子を飛ぶる雉乃声

海苔すく水の名にすめ都鳥

小田へすゝきも桂やのゝ咲

夜すがらにかぞへつる江北星の数
ちんまりと蝦にそへる涓ゝに
帆柱のせみよりおろす雀かな
苗代や夜はひまなる畈借れ
空はおろし俵に渡す小舟かな
景政が片目をひろふ田螺かな
みれ汲にうつる手
孫とも乃蚕やしかも日向かな
来るや桑の実に酔ふ尾張

沾徳岩城に逗留して
餞別のあぢきを賦もる
よしやしかりしに
杜宇や鳥が江世とも此席
南村千洞仙臺へくだりし
行春や猿足を蛤乃意貝
富士乃絵ものそま小侍り
三帆舟ハ塩風になるかな江
小庭にめしける梅乃小枝に
駿の草蓋をなんともそ人に
句をすゝわけるつゐて
梅の名をとしてや駿のやどかり

いせの宮津をも見る猫
　夕けしきかな
馬ハ出る子を御門や偲偲師
偲偲師河波の鳴戸金も小豆以

四睡圖

こけらかまおても動くや虎の耳
　三刕小酒井村觀音寺納
如意輪や軒も一つに春日影

或ものゝ語りに比丘尼を
海のおけるかせりしたり
住持乃深くいたましみて
されしに五ツの法を戒ム

能睡　烟か所嗅出しねむり
能忘　なりへ表も七ツ日か秋の雨
能捕　鰯うと鼠の味を向ては
能狂　陽炎を志らり手打ゑかな
能眺　糸のあるあちとあつめし花心

自ら
蝶をも嗤て子猫をも舐る心かな

足袮をつまえゝ猫や雪の中

猫の子にくんつほくれつ胡蝶かな

市間喧

浮け本堂の手なゝきれゝ雨蛙

嘉延酔帰の駕籠の内にて

かひなく〳〵ん　春の夜の女とみえんすかたかな

宰府参詣の舟中

菜の花乃小城に角あるかり

醴に桃李の花ん　純白し

鶏の獅子にはさゝく逆毛かな

王子曲水もみはされて

弥吾を烏帽子にさせん岩にて

曙やたまに桃花の鶏の声

花にそふ桃や茶房の踊

備えあて雛の宝や延喜式

たてつるや盗まぬ雛に松浦舟

おはしてる木兎もあり雛祭哉

雛やさる碁盤にまゐらせのうけ
三月四日なりけり
ひなやこの佐野のわたりの雪袖
阪のひな清水坂を一目の角
折菓子や井筒に組て雛のうけ
雛のさ夜宮腹しに涌しける
永代島八幡宮参詣
汐干やさらへ流て来れ次第貝
和歌のうらむ比月を踏ん汐干かな
紀國の網引つゞきて汐干かな

第酌
まとゐしや雛に酌して小盞
曲水に仇の氣違ハ茶碗かな
菓子かはまにけし人形也桃の花
曲水や筧湯にする宿なかりせ
飾られて祝ひすさりけり雛の皃
ふり袖を雛も嫌め乳の母
雛くれ世人を和泉の樓かな
緑豆(ヤヘナリ)の昆も白し桃の眉

須磨はよ所にあむやとり合
貝こそへを並べ行に
蛤のしらもはまむら玉柳

扨露にあいて御浴養のは
たちんけのなれふりよし
御ありて観抱の御書とも
ゆかしけるまゝ
聊息は秋のふかれと山路に
露詰仏御庭に在
深山ゆかりまたえらん月の初桜
縁かこかり思ふや花の庭
地神やむの外にて松もり
花さん江田子つれる　盲児
いさしらか小町か娘の名はしに

黒谷にて
下向の人やちりをまつ桜
仁和寺
れおつ戸のやさしきなかし桜かな
上野にて
深助で庵はもんまなる桜哉
妙説坊より花送られけるに
文は読まで桜にしたる便かな
花中尋友
饅頭で人をとらへる山桜

一 竜を袖上にと招れて
初桜天狗のつらにあらせん
友猿の友さそはれすに花衣
三月廿六日舎衆亭北
山にて佛備しける
佛近所や花のこぼれをあらそひ
門柳 葉をはらふかもし
ぬるみす嘛
佛間より児りへすか花の笠
矮屋妻 奴の膝をまくらのぬるき
なまる心まかす酒を呑て
傀儡の鼓うつなる薬かな

表中郎
面上右西湖

石河氏宜雨公の山店に
美景をあつめて四方に四の
風情をもてなし給へるに
二節の巻ハ角豆か山にゝ
護國寺とあそふ時
ちりてむかふ道て
白雲や花に旅行都嵯峨
立花をあそはれせし
けふはかりく主にかへて花衣
京よりくたらん人にまかせて 浪華
花に遊て歌書よまん都人
覆よとすれ棒つき出るも此山

山桜様花を放して梢あまる
花あらても人の礫すれつつみん
花ある枝物くさて女いかなりけり
侍座
花みすそ表書院て古月代
老て来て都ハ幕の盛かな
花盛子て阿るらはし夫婦中
まれ盛ふく人 踏する人しるも
世乱家也五年已来乃女とも

目黒松隣堂にて

浮世床を禁に咲也山たゝら
　　遊東厳山　三句

小坊主や松にかくれて山桜

八ツ谷乃山ぬさくらや一沈に

人を人を恋の姿やたふに香
　　茅秋山かうして

明星や桜たゝぬ也山かつら
　　扨も殺生偸盗あるを

何をしと花に五戒の桜狩

行露云争て佛庭の花を折り
けるてしおとこのりし件を
花をぬすん使者の独ゆる身を知
好子古さてを作して
そのもとよあるきしあるや小盃
酒のたゝみはさらて花を
　　しかなん年
わ郎しに漬味みせし塩桜
　　惜花不掃地
家奴藤も今朝麻ゆるしけり
　　雨行
さくらちる坊主五ヶ八てされな

上野清水堂にて

謗うけても盛のはしら　卜

ちる花や踏もたをへらる足の心

日論すみの偶と迷亭のうく
以緒行　翁與し　斎

春は酒偶とも俤ん　塩　香

一食千金とうや

津蛍の何五両せんはしら　鯛

辛未の春上野にあそべる日
門主薨御のよしをきゝて世上
一時に愁眉ひそめしるを

其弥生その二日そや　山はしら

花に詠てこのさめく　喧嘩　貫

上野ノ御

ゆり徒士の立るはの花のかげ

尋花

梅木屋の亭主留るもいすら

織りもと法水に遊ひて

車にて花のをかりや　東山

菅笠をすせて川合ん人　誰

酒を妻妻を妾のあるかな

此雨に花のあめ人や　家乃豆

王維山水
寸馬豆人

永代寺池急

池を呑大河入あひ花の紅
南盛たりしめて上京は
花て濃伊賀を仕まつりて裏秘
大悲心院の花をのんびりて
灌頂の閣よりもて桜か
茶もうひけれ盛焼を山桜
折とても花の間乃せられふ
出見鳥や鐙子のこ所初さくら
妙不の山名　桜ヶ田

海棠の花のうつや飛月
小島居ハ花雪の非らつゝし山
月雪ト山伏もの事数はし
亦是より木更一てんめつしか
蔵咲て裸ら日をかそへたり
且夕ゆきしぬきしむるは川
松杉や龍ける蔵の櫓
心あて所拝ゆんたまふ岩つゝじ
よ深あん女石の五体や蔵所
白蔵を酔みそまつる不雨哉

深竹川ゟ遊

観の気ハ山花乃隣や志らぬ哉

錦にも菊の風を惜らし

三月十二日含春亭の花
すゝし百五十余穂うへ際
ぬるゝ下遊に倚りて

植足に三切の供や山桜

明くゝ入相

けしと花乃名残や節扇

秋航　疑せらる　旅らるゝ

名それや菊植らる扇元

龍樹菩薩の禅陀伽王ニ對して
貪欲をいましめ給ふあへる
有瘡人近猛焰雖悦後増
苦の文のこゝろを

雁瘡のいゆる時ほし御法ゟ

广新出鈔ニ
一目之羅不能得鳥之羅
唯是一目付文のこゝろを

なるほどに悲し　猫の行衛

意馬心猿の解

立馬の曰を猿の流菜心

花のさ白くあれ
みりせき入しみの
おもかけのせ

雑司谷にて

山里ハ人をわすれの花見かな

竹の三嘯亭侍従にありて
寛政二年三月廿七日ニ
京使千しゆらぬしを祝して

萬歳や廿七人萬歳より

芭蕉の自画十三懐周之讃

師の坊乃十年志たし柳陰

若竹やおや知らぬ草にも時鳥
習ひ乃面起すやおもくおん
渡舟やおもてふらし秋雲
夜逗室のつるゝや子紙
官城
歴ゝや下京の秋の時雨
河東
川むかひより色参へり子紙
鶯啼やけあるのをも郭公
暁の水鳥を啼かすや　郭公

廬山雨夜

百間長屋にて

鳴る人の涼らんらうなれや

る紙一二の橋乃長縄なる

阮咸の三味線売り 鳴る

修廊し

鳴るあつき傘を買せたり

东井山

夜丁それけ探る太鼓館

ま以てしの用さへ月に鳴る

寮坊主の末ハ厭し おそれおほし

宰府七十納

おそてすゝる居くし越よりり

林中不賣薪

せまあくや山鳴る町さうき

同じ江さりし村にて

しふ山新場の日陰や鳴る

禁る五加々おくを隠くさし

曲絶 人不見

咲の文吐ハやまりゝ讨ら

鳴るわれや嵐にひられきん

子もかまに植もかまはす時鳥

母におくれ侍りてよみし

あふはゆめのミ見る時ん

声に母をこふすか郭公

松風の一声を借して

あはミいわかれて

兄の間妹またひさへせおくきます

素魚まて

蛤乃やうきて降や月ともきます

それよりして杜鵑鳥や郭公

墨滴を硯に寄之ほとゝきに

白文

入夏の四月に入けき　郭公

時鳥茄子も三ツの小袋かな

うけけるあまた人の表子に

ねふりやさまて

郭公憐そあるのとすみかあり

月清て腰ぬけ風呂や郭公

六阿弥陀あけて鳴らん子規

浅草寺樹下

出つる蛇銀杏子よらん郭公

葉をかさて画れぬ梅や郭公

ねとふ降らむ時の　孤蒙

時なる人を馳走に寝ぬ夜かな
目の上に目をつくくや　子規

夢昼

妙ハ目に禄笑を浮へ記云
姉が聟の野史忠功孝心を
またしめされて禄をゆるさると
ふうふせずにさて作るを
起てみけは関ある市云記

佛さへこの世あふるしさま
志つてやけふハ生れもせん
癸鈔や母にまいらせて仏生会

風光別我苦吟身
大酒に起てものうき袷かな
赴俗にさめぬさく着や衣更
一つとりに袷に成や黒木うり

卯月八日母におくれて
身にとりて衣かへうき卯月かな

慈母墓
花ぬまにうやしみへつる蕣哉

上りける
灌佛や捨子に別るるの児

若葉白合よ
年寄し日ゟの雲の箱れこ
隣つゟり並て捨し　桐の花
又のたゟさ
うられめや異見に潤む夕牡丹
いつし見比部北さの牡丹哉
河内新心寺
楠の證也ゟし　ちるん哉
篠節孔を
志ゟ火の鏡まうる　牡丹哉

雨意　艶士にめてく
ハやきうつみ気よわらん哉
池田の蒔棠子背柏の札状を
あつめて集ある比
さしも見角に火とゆはかるゝ筆
下総何月於中の一日
隠岐殿のくまつんでやせ鏡山
翁塚百里　全阿　蒲盤翁
上京の時　三十三日の此節も
窪家開元　奉幣使
清伸美の人の盃して
とゝ氣て伊せと誰ゟ夜ゝ

屏風に叢房て住するの家
迷ひ子も三位よみし時雨

長崎屋深けう家に紅毛来
貢の珍く奇なりとして

桐のむし羽彼の鶏鵲不言

愛娘子

鶉啼て玉子吸敷ハおそれり

席令初めて上京に餞

涼しさや都のそらや連也金

揚州霍

護国寺にあそふ

水漬に涓てちるや牡丹

ちきりにし罪く名ハ二夜住ても
果の惜も何りうきつらさ
篭おけ家に提燈牡丹

李納

一ツ乱浮殿やうけて杜若

田家

おとめに足洗りて嬉しさら
汁鍋に笠のしつくや早苗取

木賀入湯のころ

あそしとや早苗のかるゝの門

袖裏や茄子よりけふ白く見ゆ

舟寄せ均しを吹や夕あらし

卯の花や蛹うつゝにふたり子

よのなかやいつ迄の御所のかゞ諸

寄竹呼長志

老僧の筍をとかむあたりかな

筆ノ与竹よりおくよ大河ゝん

竹の屁をさわ若葉咲や五月雨

腰下恵寸鉄

筆や丈山ふとの鎗の鞘

素堂居

草むらハ皆喰ものそ夜の草

楓子居

夏草や家ハかくれて御用芽

夜草や橋臺見えて河通り

目角の罡の棧や築ちらし

咄ぬ猫のおむかふ庵かな

梢につれて一里ハ余り岡の松

畫興

争ちぬ虎れ耳やうらかな

戸塚驛舎にて

謡謠の諺ハ已日の旅者なり
帆をおろす舟ハ眠り殊られ
夕蝉や女の肩にあり中なる
志らしすり通る路

世中をさ渡りて小鯨之白
飯鉢の鏡あつりなし都なり

和定詩に

伴せおても松魚あらし　酒匠
こよろぎの名ハ昔まてもづハなり

呈扇江仏餞

篝木や人るへさつる五月雨
行られや足もおを通る人
報せら母子の年まえや五月雨
行られや下の土の燐乃を原ハ
かりはるや傘にはるか人形
さされる酒匂てなる和茄子

巌宥院殿乃大法事を
東叡山に務玉ハる

かりはかの中にても休むり法の色

市譯吟

百舟とかる鯉や廿の丸組
なあ千々のはりもうごく風の
公門に入時
あやめ引く時は障子乃こゝろかな
浅瀬を沼になしける菖かな
ほとゝきすあやめもはやめ
うつらぬ宿にてあらし
やとしかほしぬ　何某し
新へてよあり　伊勢大輔
家のしうかんし　作
菖葺て蛙のつらにはやめ哉

はなやく魚をうつす白銀
二色の物をやすんでかゝとの
古郷とおもひよりとの書化し
その人形の風俗をとゝのえま
いさぎよくあとよりつく人形いかにし
新むし坊主ちまや花菖
五月ごろまでまりせん　家にて
屋根葺とて並てかけし菖かな
あひしれる女の塔のほとりにて
ふところしれ
山笹の粽やせめて湯あく　さゝ
艸の戸やいつともののひ粽

本たし夕へを志めて菖か

五月十二日

雨雲や市も酔日乃人あつめ

藻の花や金魚よろこべる盆

酒滿

菖のむ乃酒其童子も二面

青嵐といふ歌を

海松も手ふ杉の花や新涼山

蝙蝠の屎もふまふれあやめ草

交代の葉守の神や初柏

疱瘡も何といふ春も不懐　朴

綠槐　高處

ちゝせ三や笛に髭を十文字

すゝりつゝ酒の肴に這せけり

躑躅会やむかしの角乃如牛

おめてや井に生まるゝかり

文七にふするなる蛇のからつき

河原町まて

妾ゟ家ちゝるまいかい告やらん

宇治まで

川ぐまや水に二重のちゝる垣

うつせミの鈴は
長虫の暮にこれる命かな

谷中

風ふかぬ森のしつくやうんにゝ
　僧正君

僧しらず貝ふく僧よあんなる
下やミや蛇根性のふくれ声

露江公淄池の高閣に
なしめて凉を揃んとせし
常陸ら合せありしに

長ふは我八御篭とる女かな

宇都宮入道

蓮生ハ高名よりは虫を掛ひ
樺脱に仏をゆるりえの鎧なる
よあり也しみの松ら土用たし
揃へ木蛉にかけて土用干し
浴衣着て見貫に汗袖まで

狙公 淄池にて

風むいて猿まなぶするほつれ声
氷晒よりハらぬ仏のしつくかな
干瓜やうつむけてお目に母
瓜の皮水も下てに流れけり

亀毛に餞

紙の衣笠ハ重ときれまゝり

破扇の圖

維光か屛架く拵し扇哉

烏飛鉢の珠ふきのはつきね

紅よいちかふのふさ行白たへ

せミ帰や木のかけしる園かり

隣からはけ木にくむやせミの声

竹のせミ行からに声する鳴哉

ねうてやせミも雀も蛇を経

白雨や内儀多少く物語ケし

市中白雨にあふ歟

蓼よ香も冬ぐるまに醒し

白雨やもりをとむれを蘭の子

ゆかりに化ゑ営ありて吹き乱

夕立よひとりかゝる女ゝ船

うらひすとのミ

牛鳴三遠の雅筆ニて

雨乞するものあかりけり

夕立や田を見めくりの神ならは

翌日雨ふる

舟中吟

流るれ乃篠波ほ出て里急さ

西行と御茶坊主ハ法師なり
芋ねたき腹をつもりけれハ
得ん事の絵ハ我の心に
土用のいりより日の此こ
常本に茄子ハつくるのみ也
鳥山へおもむく人に
まさ柳やつらむ社ある坂の色は
ふのわや白き鶏埴根より
鴨焼ハ夕へを考ぬ世事家
麻村ハ家をへくる和車

国人の隠者条宮しけるに
まふけすゑて
夏の君を吉次ら冠者に服ハ
旅の様に瘧気の記なり
生死去来
鳥のやさしくよりまつ声
捕虎 東坡
七ッ色の好まるむや足疾鬼
好の様にゆめのうき橋かかる
敗色やくひ鷹奴角の私聖
かやかや好色つる声に老猫

更闌

石灯篝火清く精き舟ハ
いさけさはずてんどうと
うちたおされたかさめてハ
切れる事ハ減り蚤の跡

旅店

馬士の雪幌ハ酒屋に拾りけり
あるへ大あさりてへを二かけ
刻て盃とし扨ハ蛇さんのまし
肉ハ象に塗てかおの字もし縁
をうらせて旨きをのそむ

清ら飛李ハ白ら面にうかりけり
形目鼻あきさんのやうに

浅草河歳で吟涼

呼ん散舟されてすれぞミれ
川涼ミ猿に泥を詠りなか
涼ミつむ安房や上総に舟ハ涼し
すゝしさや帆に飛沢のちり蛍
舟暑し眠られのそく扇の影
午んハ今日も棚干や橋に行りん
涼しさや先斗花野しの流星
辟退之捨酒吟あそぶ
酒やけに舟をうしやむ深ミまり

てゆきし
此碑ては江を哀まぬ蛍かな
牛御前
是や皆雨を哄人すゞみ
橋上休老と題す
牛泥む老の歯ぬけや橋涼ミ
艫を玉子てまくすゞみかな
海を見て涼む角あり鬼瓦
餞久松粛山
筆をとさし泥笠やちるまで

人のよをめて
涼しいり森てつもり刺ゆめ心
画讃
大虚涼し布袋の腹ふくゆく祈
日枝にむかひの山弥を
十八の涼みつまに汲く涼みかな
河原にて
晩景を牛流てすゞみ車かな
小松にくゝる風あり庭すゞみ
勘当の月見をる身し涼みかな
遊子残月

暑字　はしらにて
むら雨の末跡に通る暑さ哉
呈饒　露江石
供りこの鞘の暑さや岡の松
人まて暑れ数あまり　端游

自棄
きらり見て翁起昼寝名残さ
五月十日　雷雨かはけしの
薬店にやとりして
明店より神鳴時て鮑の蓋

住吉にて西鶴か矢数俳諧
せし時は後見にまかれた
譲の皆に二万余の蝿あつめ給
七十余の老翁にてまかりて孫子
ともこそりてあくは尻に追
善の為を乞けるその老翁の
いまそかりけ時さえは
見るんおもはしす哀にも
おりいよしすして古来稀
なる寿こそあれといひしなる
ゆかしさられを
六尺も力おとしやふり　西
村田思菴りまし

辛この夏秋井江のある社に画
アカかる霊仏霊神へ額を
奉りけるしるて興廢の節
嘆散あらしなる中にも当
時の用にたてものの節てらふし
れをうつして官営司るのさ
かひや暑をちやうに霍
乱虫氣のはやりもなく蝋乃
すくにあつては行程の
遠近を過番することて
あつて世を振井水の下向に
秋天　和歌よみやに
夕涼にあそび拝見し賣名号

昼顔は朱操涼む花也
故に翁の名を借りうせて賛
のうむ何をその借りは夕顔
乃為翁書よりるとたつい
借りゆへ自白を申候
夕顔や一自乃とす花の宿
　逐　欧陽公賦
蝿の子北児子舜ある行わし
　昼　讃
蜻蛉の小袴きふいたし車百合
子供肩とこつま　んき　遊び夏日早

魚市涼宵

楊貴妃の夜ハ活たる鱸かな

七月七日霊芝を感して

東湖の蘇子天に諸作る子

出迦葉に欺かれても蓮かな

荷切や下へ貝りし切も荳角

奇仙貫之の古画に

冠にも指をそふめり奇乃汗

吉備七妻なかりにて

国中へれや世をなの海

上下と裸の乃分多け升

あは所かよりあさうは書
ゝら高うけしさんせよとあり

祭や扇の村を垣根に
と尋て来ぬりゝふゝさゝまて
まつ軍鑑らくらるの扇子さて
さんなしませゐの再ハやりまて

婦れやる一本すまく女なし
鬼のやうある法師ぶりのくへ
くるよて在狙師はとゆあれ
是例して何らしのりと云外
介抱せしも生のをひて心よ
いさしみとも落されしうへは

老若ことも食養嘆や瓜畠

瓜守や桂の生例さゝてより

越おの人の土産をもめて
光廣つのゝをかりし会作り
謂れさんすゑふえしをも袖で拭
元角田川牛田をとらまよて
いそのゝ清水こゝろよきお橋
彫舟繍よ帰よう入し
貫之の銘のすゝみよ川まで
きやんけの一句を扇よ岸れて
生の松ゝのうゝしをも尾
木曽路と冷凍す味を志くまし
市原まて
出たむと枯木の小町手れさり

午まと泳も林檎ハ油で面白し
百日乃あくらし恋しやと洗ひ鯉
四郎よ弱めけあけや心てん
気のめとしぼれうよもの祭り

七日

許すめる人の手なひも祭り
山王の氏子として
新穀を天下祭や　土くるよ
番附をとうるもみなの手なひぬ
松原よ田舎みまも昼休み

夏痩に能因よりも小食し
乞食ハ天地を着る夏衣

高閣挽涼

香薷散犬かねふつて雲の峯
蝙蝠に宗治のさしや一墨
蝉をりてあます人手
うきし舟の涼しお中へかきの甲
ねてらとく蓮に花そよ鷄頭

大雨大風

吹降の合羽やそよく沖後朴